

江西の禅宗の推移（上）

鈴木 哲雄

一 承前

『宋高僧伝』『祖堂集』『景德伝灯録』は五代末から宋初に編纂されたものであるし、しかも江南から福建に懸けた間での編集であるから、登場する禅僧たちには、時代と地域の両面の偏りを認めないわけにはいかぬものの、しかしながら活躍した禅僧の名の最も多く知られるところは、この江西地方であったのである。後に五家七宗という形で纏められる流派にしても、江西から発生するものが過半を占めている。江西の禅宗の姿を知ることには、禅宗、特に南宗禅の姿を知る重要なポイントと考えられる。中国においては一地方に過ぎない江西に、特に禅宗がなぜかくも盛んになったのか、この点を明らかにすることは、南宗禅を理

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

解するための視点であると見きわめてよいように考えるのである。そこで『日本仏教学会年報』第四十五号（昭和五十五年三月）に、

江西地方における禅宗各派の展開

一 江西地方の地理的歴史的概観

二 江西地方への禅宗伸展の概観

三 山岳仏教と都市仏教

四 拡散と収斂

を論じ、データを通して江西の禅宗を概観した。本稿においては、これに続いて、江西内における各地域で、禅宗はいかに伸展し活躍したかを、禅宗全般の特徴を把握するための基礎作業として、見てみることにする。ただし、廬山は九江府の九江県と南康府の星子県に跨っているのではある

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

が、分割して見ることは適當でなく、廬山を一地域と見る方がよいので、別出して、既に『印度学仏教学研究』第二十七卷第一号（昭和五十三年十二月）に、「廬山の禪宗」（これは紙数の都合で未完成である。本論の注記の後に、この続きを付した。）を論じた。本稿はこの二拙論を承けたものである。

二 開拓期の禪宗の動向

江西は、吉州及び廬山に四祖道信（五八〇—六五二）が住したことがあるように、他の地方に比して禪宗が早くから入った地方であった。道信の後しばらく空白があったが、六祖慧能の弟子蒙山道明や青原行思（一七四〇）、及び神会の弟子たちが入るに及んで、活況を呈しはじめるものの、まだ処々に点を置くような様子で、線につながるまでには至らなかった。この時期には、特に壇經に出てくる人は、例えば洪州法達や信州智常など、史実の人と見るには躊躇せざるを得ない場合も多い。しかしそれが仮に事実でないにしても、またそれなりの、例えば江西から六祖のもとに多くの学徒が集まったであろう、というような一面の意味を具えているであろう。その後馬祖が福建の建陽から江西に入るや、点から線へと結ばれる形で、江西の禪宗の発展の

基礎が築かれたのである。そして馬祖の弟子たちの教線拡張によって、線から面へと、禪宗が一時に開華したのであった。開拓期はこの線から面への広がりを見せはじめた、馬祖の入寂の頃、七九〇年頃までとする。

〔洪州〕（予章郡、南昌郡） 洪州は江西の中心で、その中心は建昌即ち後の南昌である。単に江西と言った場合でも洪州を指す場合が多い。蒙山慧明の弟子の瓌、慧能（六三八—七二三）の弟子の志徹は江西に住したとされるが、まず洪州とみてよからう。ただ志徹については、俗名を行昌といい、北宗の門人の嘱を受けて慧能を殺そうとし、三度刀を振っても身体を損うことができず、それが機縁で発心して慧能に学んだ、とされる。これは荷沢神会（六七〇—七六二）の『菩提達摩南宗定是非論』にいう荊州刺客張行昌なる人物を發展させたものにはかならぬ。慧能の法力を潤飾する役割としての人物で、それ故、志徹を以て実在の人物とするのは適當でないであろう。蒙山の弟子に、別に洪州崇寂がいる。目録だけでわからぬが、洪州に住したのである。法達は洪州の豊城県の生まれで、慧能の弟子とされる。敦煌本壇經に初めて名を出す人で、慧能の遺誡の門弟である。法華經を誦し学んだが、曹溪六祖に参じてより禪門に

入った人である。慧能は菩提達摩のごとく半ば伝説化しているから、その弟子とされる人についても、そのまま信ずるわけにはいかないが、弟子たちが南地の韶州曹溪から四方に散じていく中で、大庾嶺を越えて、四祖道信五祖弘忍（六〇一―六七四）の住した雙峯山に近く、その道筋にある江西の中心都市洪州（予章）に誰かが住したということとは蓋然性のあることで、後の灯史に代表的に法達や志徹が名を出してくるのである。志徹は否定的に見た方がよいが、法達については必ずしも否定的に見る必要もあるまい。誦経者が禅宗に転じ、禪的立場での念経の真を知り、しかも念経僧を持し続けたという法達に関する記述からみて、曹溪の禅が義教の枠を覆って伸びる様子が示されている。それは浙江の天台学者永嘉玄覺（六六五―七二三）や、涅槃学者印宗（六二七―七二三）を摂し込んで行ったのと同様の、初期の禅宗の幅広さを表現していると思われるからである。上記のごとく蒙山の弟子が二人洪州に入ったのであるが、蒙山自身も大庾嶺上の話で象徴されるように、慧能とかなりの緊張関係にあった人で、そういう人を摂し込んでいく幅の広さがあったからこそ、後に南宗が隆盛を来たことができたのである。

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

馬祖道一（七〇九―七八八）は南嶽に学んで後、福建建陽から江西の臨川に入り、それから公龔山に入って多くの門下を養成し、ついで洪州開元寺に入って益々拡充した。権徳輿（七五九―八一八）の碑文⁽¹⁾では、はじめ路嗣恭の請によって住した、という。『宋高僧伝』によれば、開元寺に入ったのは大曆中（七六六―七七九）で、居ること僅かに十年で、詔によって旧壤（公龔山か）に帰ろうとしたが、鮑防にとどめられてそのまま住した⁽²⁾、という。馬祖が洪州に入ったのは七七〇年代初である⁽³⁾。開元寺とは、梁の予章王であった肅綜が大仏をつくり、それから葛譚が宅を捨てて寺とし、大仏寺と名づけ、開元間（七二三―七四一）に開元寺と改めたもので、大曆間に馬祖が道場をここに建てたのである。大中間（八四七―八六〇）火災に会い、後に南平王鍾伝（―九〇六）が再建して上藍院となし、令超を住せしめた。新建崇梵坊にあった⁽⁴⁾。開元寺は歴史も古く、洪州でも重要な寺であり、馬祖以後、江西における禅宗の中心的存在になっていったのである。馬祖の禅は通常「即心是仏」という語で端的に示されるが、晩年には、大梅法常の「梅子熟せり」の話の中でいわれるような、「非心非仏」への展開があった。即心是仏から非心非仏への展開はどうして

起こったのであろうか。この点については別に論ずる機会を持つが、⁽⁵⁾一つには開元寺に入ってから義学と緊張を生じ、そういう環境の内から生じた展開であったと思われるのである。

馬祖は自ら石門山を入寂の地と定めた。石門山は靖安県北四十里大梓都にあり、そこに泐潭寺があつて、馬祖を蔵塔した。⁽⁶⁾そして宝峯寺と改めた。泐潭は宝峯寺の傍にある。⁽⁶⁾その名を取つて寺の名としたのであろう。しかし『建中靖国続灯録』のように、例えば「洪州泐潭山宝峯禅院真浄禅师」とも言つて、山名としている場合もある。『輿地紀勝』⁽⁷⁾に、権徳輿が「宝峯院記」をつくり、商翽が塔銘をつくつたというが、『全唐文』に権徳輿の撰した馬祖の碑銘があり、そこでは宝峯院とは言つておらず、『景德伝灯録』の馬祖章の割注に、「按ずるに、権徳輿、塔銘を作りて言く、『馬祖、開元寺に終り、石門に茶毘して塔を建つ』と。会昌の沙汰の後、大中四年七月、宣宗、江西觀察使裴休に勅して、重ねて塔並びに寺を建てしめ、額を宝峯と賜う」という。割注の言わんとするところは、宝峯院といわれるのは大中四年（八五〇）以降である、ということである。そうすると権徳輿は八一八年卒であるからまだ宝峯院

と言われていないはずで、輿地紀勝の一文に何らかの混乱があるようである。宋の張商英の「選仏堂記」によれば崇寧天子（宋、徽宗）が馬祖に祖印と諡し、塔に慈応と名を賜つた、⁽⁸⁾という。馬祖入寂の後、百丈懷海は百丈山に入るまでの間石門山において守塔となつて住し、馬祖門下の育成に當つた。

洪州は馬祖晩年には既に世の耳目を集める禪の一大中心地となつていた。華嚴学者であり、荷沢宗を自認する圭峯宗密（七八〇―八四一）は馬祖一派を洪州宗と呼んで、同じ南宗である荷沢宗との異同に熱い筆をふるつてゐる。

〔筠州〕（もと洪州）ここは唐初、靖州、米州、筠州と名を転じたが、武徳八年（六二五）から洪州に入れられ、保大十年（九五二）になつて筠州となつた。それで開拓期より隆昌前期までは洪州に属する。しかしここを別出しないと、洪州が広くなりすぎて、地域性を明確にできないので、後の分割に従つて一項を設けた。まず初期において、蒙山に道明が住した。蒙山は灯史類では袁州蒙山とされる。蒙山は袁州新喻県（臨江府）北九十里、瑞州（もと筠州）上高県南四十里にあり、山の北側が上高県、西側が袁州分宜県に属している。⁽⁹⁾それから、上高県南三十里（又は三十五里）の

善塘村に道明が建てた蒙山聖濟寺がある⁽¹⁰⁾。また、蒙山に靈隱寺があり、道明の塔のあるところといわれる⁽¹¹⁾。靈隱寺の位置がはっきりしないが、袁州側であろう。灯史に袁州蒙山とされるのは、山の一般的呼称もしくは道明の塔のある靈隱寺によって称されていると思われるのであるが、実際に活躍したところと思われる聖濟寺を中心にみれば、洪州（又は筠州）に属すべきものである。道明は五祖弘忍に学び、法が六祖慧能に伝わったことを知って大庾嶺まで追ひ、慧能の磐石に置いた衣鉢を動かすことができず、確かに法が慧能に伝わったことを知る。慧能に関して一際精彩を放つ話である。この話は既に『曹溪大師別伝』⁽¹²⁾（七八一年成立）に原型が出ており、慧能が衣鉢を慧明に還すと、慧明は衣鉢のために追ってきたのではないとして、密言を受け、却って続いて追ってきた者たちの患を慧能のために除く、という筋立てである。その後慧明は廬山の峯頂寺で三年間修し、密語を悟ったとされ、蒙山に出て化を広めた。蒙山は初期において重要な地である。

〔袁州〕（宜春郡）萍郷県北七十里に楊岐山がある。その北側の山下の宣化里に広利寺がある。⁽¹³⁾ここに荷沢神会の弟子の広敷（六九五―七八五）と乗広（七一七―七九八）が住

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

した。『江西通志』では広利禅師が創めたというが、広敷のことをいうのであろうか。それとも下に述べる乗広のことをいうのであろうか。広敷は南燕（河南延津）の人で、京師の思浩という人に学び、受戒後、嵩山や長安、洛陽に遊び、神会に遇って玄旨を明らめ、後に楊岐山に入った。終日瞑目し、木食した。仙人が多く、後を引きつれ雲に乗ってやってきても、遠ざけて二人だけで談論した、ということ、『宋高僧伝』巻二十で言っている。そして、系して、仏教と神仙とが区別し難い場合もあり、広敷が仙人と交わって仙人が対等のごとくにも見え、また同質の論のごとくにも見えるが、またそのような例はインドにもあるが、仏教を神仙と同日に論じてはならない、という趣旨の弁を載せている。

⁽¹⁴⁾劉禹錫（七七二―八四二）に「袁州萍郷県楊岐山故広禅師碑」がある。これは乗広の碑文である。乗広は容州（広西容県）の生まれで、衡嶽で出家し、初地をひらき、洛陽で神会に契い、後に楊岐山に入った。三十歳（七四六）に受具しているというから、神会の激しい北宗批判の中での弟子であろう。入寂して、塔を禅室の右端に建て、九年後に弟子還源が改めて崇塔を建てた時、還源が劉禹錫に碑文を依

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

頼したのであった。劉禹錫には「牛頭山第一祖融大師新塔記」及び「曹溪六祖大鑑禪師第二碑並序」があり、禪宗に造詣が深かった。『江西通志』で広利禪師が広利寺を建てたというその広利禪師がわからぬが、広敷か乗広のどちらかと思われ、行実からすれば乗広ということになるう。

〔臨江府〕（もと筠州袁州吉州の各一部分） 淳化三年（九九二）瑞州（もとの筠州）袁州吉州のそれぞれの一部を合して臨江府を置いた。宋初までは臨江はなかったわけであるが、別出して述べる。耽源山はもと吉州に属していた。ここに南陽慧忠の弟子の真応が住した。『祖堂集』巻四では先に馬祖の門人であったとする。耽源寺は新淦縣南の善政郷にあり、保安寺とも言った。⁽¹⁵⁾耽源は耽源とも書く。馬祖と南陽慧忠との手紙による交渉は馬祖が龔公山にあった時で、この頃馬祖は径山法欽とも書の交換をしており、この二大師との交渉によって、馬祖が世にあらわれていたものと思われる。耽源真応はその交渉に関する何らかの役割をしていたのではなからうか。耽源は百丈との交渉もあったようである。また仰山の円相は、耽源が南陽より受け、それを仰山に伝授したものといわれている。

〔吉州〕（廬陵郡） 四祖道信（五八〇—六五二）は舒州皖

公山（安徽）で師に従って禪業を修し、師が羅浮山に行くのに従おうとしたが許されなかった。それで吉州寺に住した、とされる。羅浮山は広東であるから、行く途中で師と別れたのであろう。ところが賊が吉州城を七十余日も囲んだので、城中の人は飲料水にもこと欠いた。道信が城中に入ると井戸の水は湧いてきたし、敵を退散させてくれという刺史の願いで、般若を念ぜしめ、城中の人々が同時に合唱すると、城の四隅に大人力士が現われ、その威神力で賊は退散した。その後、衡嶽に往かんとして江州に道を取り、途中廬山の大林寺に住したのであった。天台学を学ぶために大林寺に入ったとみるのは適當でない。道信の師について『続高僧伝』巻二十道信章では明らかにしないが、『伝法宝紀』以後、僧璨とされてくる。道信が「吉州寺」に入ったというのは、吉州の寺に入ったという意味である。吉州府城東門外に雪山寺がある。隋の大業中（六〇五—六一七）四祖が祥符寺に住した。時に寇が城を囲むこと七十日、祖が城中に令して屠を禁じ、仏を誦すると、神が城上にあらわれた。賊は懼れて退いた。また城中に疫病がはやったため、また仏を誦した。その時六月であったのに雪が降り、民の病は愈えた。それで雪山寺と名を改めた、と

は地方志の⁽¹⁶⁾いうところである。従って吉州の寺とは雪山寺をいうこととなろう。仏教が中国に入って人々の信を得るのに神異によるところが大きい⁽¹⁷⁾が、禪宗もそのような形で畏敬の念を得た場合が種々ある。吉州における道信の逸話もその一つである。道信は後に廬山の大林寺を去り、湖北の双峯山に入って、禪宗隆昌の基盤を据えたのである。

吉州志誠は敦煌本壇経で十大弟子の内に数えられる人である。本貫は吉州の泰和県で、はじめ荊南(湖北)当陽山玉泉寺で神秀に学び、後に曹溪慧能について大悟し、玉泉寺に住したとされる。吉州と冠するのは、本貫によるのか、一度吉州に住したことがあるためなのかは不明である。本貫を以て名に冠する例がないわけではないが、多くは住地を以て名に冠するので、一応ここに名を挙げておく。神秀が入内した時、弟子を散ぜしめ、学ぶべき人として韶州の慧能を挙げた、というのは神会の『菩提達摩南宗定是非論』に言うところである。神会はその言に従った、という見方もある。しからは志誠も同じケースに属する。ただ壇経に出てくる人物にどれだけ信を置いたらよいかという判断はむずかしいところである。

慧能の弟子の行思(一七四〇)が青原山に住した。それで

江西の禪宗の推移(上)(鈴木)

通称青原という。青原は吉州安城県の生まれである。青原山は廬陵県の東南十五里⁽¹⁸⁾にあり、浄居寺(浄居寺)が青原山中にある。『江西通志』⁽¹⁹⁾にいうところでは、唐の段成式の碑、顔真卿(七〇八―七八四)の題名、宋の蔣之奇的碑があった。また宋の欧陽修(一〇〇七―一〇七二)は顔魯公の「浄居寺題名」に跋を記して次のようにいう。『唐書』記伝には、顔真卿は代宗の時検校刑部尚書であったが、宰相の元載(一七七七)に憎まれ、祭器不修を論ずるのに坐して硤州員外別駕に貶された。「題名」では永泰二年(七六六)罪を以て吉州に佐たり、という。唐書と違う。真卿は湖州の「放生池碑陰」に序して、硤州に貶されたが、旬余で再び吉州に貶された、といっている。実際は硤州に行かなかったのである。真卿は大暦三年(七六八)始めて撫州に移ったから、浄居寺に遊んだのは吉州にいた時である、と述べている。「浄居寺題名」⁽²⁰⁾は大暦二年十月のことであった。浄居寺については、景竜三年(七〇九)蘭若を建て、天寶十載(七五二)寺とし、会昌間に廃し、大中五年(八五二)重建し、宋の治平三年(一一〇四)勅して浄居禪寺と賜ったとされる。景竜三年、天寶十載のことについては段成式の碑文⁽²¹⁾によっているのであるが、周必大(一二六一―一二〇六)

の「遊記」には、段成式の碑文とされるものは、文は務めて奇渋で、或は句を切ることもできない、と述べて、段成式のものということを疑っている。段成式の碑文が信ぜられないとすると、七〇九年青原が蘭若を建てたとみることではないが、さりとて、その年代とさほど異なるものであるまい。因みに周必大は廬陵の人で、「遊記」とは「吉州諸山遊記」のことで、『青原山志略』巻六に載っている。青原は「廬陵米作麼伽」の話などで有名であるが、しかし注意すべきは、永明延寿の『宗鏡録』の中で、「吉州思和尚云、即今語言即是汝心。此心是仏、是実相法身仏」とい、「如随色摩尼珠、触青即青、触黄即黄」云々といっていることである。この言葉は後に宗密が『禪源諸詮集都序』で評した馬祖禪（洪州宗）の特徴と同じではないか。しからば、馬祖の言葉が、後に青原に混じて、『宗鏡録』でかく言われたことになったのであろうか。しかるに石頭において、

吾之法門、先仏伝授、不論禪定精進。達仏之知見、即心即仏。心仏衆生、菩提煩惱、名異体一。⁽²⁴⁾

といっている。宗密は殆ど石頭に触れぬから、石頭の禪を馬祖の禪と区別していたとも区別していないとも言切れ

ない。宗密にとって洪州宗はまさしく馬祖をもって代表としているのであるが、馬祖の即心是仏の思想は、青原に既にあり、石頭もそれを受けていたとみるならば、青原を通して実は慧能の禪の特徴をなすものではなかったかということも可能になる。とするならば、荷沢神会の南宗禪の鼓吹は、慧能の禪の一部分の展開であって、慧能の禪の主流は、青原、南嶽、石頭、馬祖が負っていたとも考えられ、南宗禪をもう一度考えてみる必要がある。この点については別に稿を改めて論ずる。

〔撫州〕（＝臨川郡）蒙山の弟子の神貞が撫州に住するのが最初であるが、目録のみで詳しいことはわからない。次に馬祖が福建建陽仏迹巖から臨川西裏山に入る。西裏山という名も裏山という名も見付けられぬから、固有名詞でなく臨川の西の裏面の山という意味かも知れない。臨川に入るのがいつごろであるかはつきりしない。南嶽の許を離れて仏迹巖に入ったのは開元末天宝初（七四一―七四二）と推定できるが、そこに何年住したかは明らかではない。一応数年住し、天宝五、六年ごろ臨川に入ったとみておく。ただ天宝二年には既に臨川に入ったという資料もある。それは『宋高僧伝』の超岸についての記事である。⁽²⁵⁾それによ

れば天寶二載（七四三）撫州の蘭若に至って馬祖の開発を得た、と言っているのである。しかし西堂の年令とのからみもあり、七四六、七年頃とみておく。ここでは仏迹巖から従ってきている紫玉道通をはじめ、石鞏慧藏、超岸、西堂智藏等が参じ、一勢力を形成した。しかし馬祖の禅が世間の耳目を引くのは次の虔州龔公山に移ってからであった。

〔信州〕 この時期ここには慧能の弟子の智常が住する。この人も敦煌本壇経で、一方の頭、と評されている。信州の貴溪の出身で、洪州建昌白峯山で大通和尚に見性成仏の義を示されたが疑を決せず、六祖に参じたとされる。大通和尚は神秀のことであるが、建昌にいたことはない。大通と智常との問答を見るに、見性成仏なる言葉は一応チェックするにしても、全般的に大通の言は北宗系の用いる表現である。大通和尚を神秀に擬しているのであろう。智常もそのままでは信を置き兼ねる人であるが、北宗から南宗に転じたというパターンがここでも示される。

〔饒州〕（＝鄱陽郡） 蒙山道明の本貫であるが、まだこの期にはみるべき人が出ていない。

〔虔州〕（南康郡） 馬祖は臨川から南康龔公山に入った。入った年が不明であるが、七五〇年後半あたりから七六〇

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

年末ぐらいまでの在住であったと予想せられる。龔公山は贛県北百二十里にあり、昔隠士龔毫が住したので、山に名づけられた。山に宝華寺及び馬祖の遺跡がある。⁽²⁶⁾ 宝華寺は贛県治の西北百二十余里にある。⁽²⁷⁾ 龔公山での馬祖の弟子は、紫玉・西堂・伏牛・百丈・鄂州・塩官がはつきりしており、大梅や廬山法藏等もこの地の弟子と思われる。馬祖はこの頃より徑山法欽や南陽慧忠に手紙を出すなどして、対外的に積極的となり、世の耳目を集めるようになる。そしていわゆる馬祖禅はここにおいて形成される。馬祖はこの後、晩年を洪州開元寺で過ごす、開元寺で真価を発揮することとなったのである。

三 唐代の禅宗を代表する伸張期

伸張期は馬祖の寂年頃、即ち七九〇年頃より、洞山入寂頃即ち八七〇年頃までとする。この期は馬祖門下の全盛期で、門下は江西の各地に散じ、江西全体に禅宗を一気に広めた。これ程の拡張はこの時期以外に見られない。それだけに活況を呈している。しかしこの期の末には洪州宗は衰退に入り、代って洞山や仰山等が出てきて、新しい動きを見せはじめた。総じてこの期の江西は、一地方といえども

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

唐代の禪宗を代表するに充分堪えられる。

〔洪州〕 馬祖の弟子讓が北蘭寺に住した。『江西通志』⁽²⁸⁾

に北蘭寺は南昌府城の德勝門外にあり、南嶽懷讓禪師の道場で、後に廃された、という。馬祖の弟子の讓を、馬祖の師の南嶽懷讓と誤っている。開元寺には、目録だけに名を出す人であるが、馬祖の弟子の玄虚が住した。開元寺は馬祖が洪州宗を高揚したところであるが、玄虚のみが名を残すだけで、禪宗はしばらく舞台から退く。これは義学の側からの圧力があつたからではないかと予想せられる。また官寺の性格の強い寺院は叢林としては必ずしも適していない。唐代においては特にその傾向が強い。百丈が清規を制定するに当って、律院から独立させる意志を明らかにするが、それは禅思想に則った生活が、開元寺という現実の場において、種々の困難或は矛盾を伴なうという事実から出ていたに相違ない。馬祖の生活は開元寺において決して平坦なものではなかった。それを中心になつて補佐したのが百丈であつた。開元寺は、後の言葉でいえば十方住持の寺であるが、後に玄沙がここで受戒するように、戒壇のある寺でもあつた。馬祖の禪は一度開元寺を離れる必要があつたし、後に令超が請された時は上藍院と名が改められ、そ

こで漸く、洪州宗の源ともなるべき寺が叢林に転ずることができたのである。

海昏（海昏が正しい）の石門山泐潭寺は馬祖の塔所で、百丈懷海が守塔となつて住した。最初から馬祖に従っていた最長老の紫玉道通（七三一—八一三）も住し、惟建・常興・法会も住した。道通は馬祖の最晩年、一度石頭に参じたが、また戻り、馬祖の帰寂の時の讖により、その後唐州（河南）紫玉山に住したのである。馬祖の入寂は貞元四年（七八八）二月で、この年の秋、伏牛自在と洛陽に遊び、そして紫玉山に入ったという。だから石門山にいたといっても僅かなことであつた。馬祖の禪は開元寺から泐潭に流れた。ここは雲巖が百丈に就いて出家したところでもあつたし、洞山が大蔵経を閲し、『大乘経要』一卷及び道俗を激励する偈頌・誠を纂出したところでもあつた。石門山は衰えていくが、宋代になつてから真浄克文（一〇二五—一一〇二）が出て盛時を取り戻した。

懷海（七四九—八一四）は石門山から百丈山に入った。百丈山は奉新縣西百四十里にあり、馮水が千尺の瀑布をなし、西北に群山、南が平原となつてゐる。山に草木があつて蓮華のようであるので山蓮と名づけてゐる。一名、大雄

山ともいう。宣宗(八一〇―八五九、在位八四六―八五九)が嘗⁽²⁹⁾て潜遊したとされる。百丈寺は奉新県西方百三十里にあり、唐大智禪師(「懷海」)の創建である。宣宗が光王であった時、迹を晦ましてここに居り、即位するに及んで、勅して大智寿聖禪寺の額を賜った。南唐になって寺を西北に移した⁽³⁰⁾。光王については別に黄檗にも詩の唱和があり、全く同じ話が香巖との唱和⁽³²⁾ともみなされており、仏教信奉者としての宣宗が、特に破仏のあとの驚くべき仏教復興よりして、不遇の時代に禪僧と交流のあったことは充分考えられるが、それが百丈や黄檗との交流という話になっていったものと思われる。百丈寺西の大雄峯下には大宝勝輪塔院がある。これは大智禪師の窆塔婆である⁽³³⁾。貞元中(七八五―八〇五)に戸部郎中知制誥であった閩県出身の陳詡(又は翊)という人がいた。この人が官にあって江西府に従事していた時、百丈に学んだ。百丈寂後塔銘の依頼を受け、「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」⁽³⁴⁾を書いている。百丈は本貫が福州長楽県で、長楽県は閩県に接しているから、同郷という親しさもあったろう。一般に碑文の製作者がその帰依者とは限らない。多くは文筆家に依頼するのであるが、陳詡の場合は百丈に参じ、よく知っている上で書かれた塔銘であ

江西の禪宗の推移(上)(鈴木)

るから、百丈に関する第一資料である。『宋高僧伝』では九十五歳で寂したとするが、百丈が馬祖の多くの俊秀の中でも実質的な後継者と目されたことからの、徒らな年齢の引き伸ばしに過ぎず(又は六十五歳が書き誤られたか)、塔銘でいう六十六歳とするのが正しい。塔銘では、馬祖の徒の竜象は、多くは万象に聞こえて京に入り、一方では郡国を安んじたが、百丈は隱棲を好み、徳は益々高く、徒はいよいよ盛んで、一言のもとに疑網を智刃によって氷断するという禅風であったとし、門人の神行・梵雲なる者が、百丈の語を編集した、ということも述べている。宋高僧伝の撰者贊寧は律宗の人であるが、百丈の制した清規について、律と異なる特異な点を述べ、しかも系して、格を⁽³⁵⁾変ずることの利多ければ、浄清を為すもの、行わざるを得ず、として、清規を積極的に認めようとしている。洪州宗は、仏教者の生活規範である律という面からも、仏教界に強烈な変革を求めたのであった。けれども義教の力の強いしかも戒壇のある開元寺のようなところでは受け入れられず、石門山よりもっと遠く都市を離れた百丈山において、確かな実践が可能であったのである。これは会昌の破仏の半世紀も以前のことである。破仏によって仏教界は大なる打

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

撃を蒙る。しかし宣宗による復興で、禪宗だけが以前にも増して盛んになったという事実は一見奇異に感ぜられるが、破仏の真意に対応するだけのものが、一つ清規という面からみても、禪宗に準備されていたからと言って過言でない。

ついで百丈山には惟政・法正・涅槃が住する。この三人は別人のごとくにも見えるが、同一人のごとくでもある。伝灯録は宋本では惟政を馬祖の弟子として巻六に挙げたが、元本では、武翊黄撰柳公権書の「涅槃和尚碑」から、涅槃和尚のことであるとして、しかしながら法正と涅槃は別人であるとし、百丈の弟子として巻九に移した。宋の趙明誠の『金石録』巻九にも、

第一千七百八十四 唐涅槃和尚碑 武翊黄撰柳公権正書

大和二年七月

とある。伝灯録の元本は右の碑を挙げているに相違ないが、しかし碑文は見えていないようであり、しかも諱は法正であるといっているといいながら別人とするのは、『林間録』や『正宗記』の見解を受けたからに相違ない。ところで、柳公権には「百丈山法正禪師碑銘」⁽³⁶⁾が残っているが、これは僅か四十七字である。その銘を記すと、

敷演毗尼、洪嚴戒範。覃思探蹟、会理研幽。振發長途、擺捐素習。入百丈深山、与衆悦随谿谷、脱遺身世。年光六易、度衆千餘。

である。ところで『輿地紀勝』巻二六に、「『法正禪師碑』は奉新県の大智院にある。元和十四年（八一九）帰寂をもって、柳公権、これがために碑をつくる。歳久しくして多く残欠なり。今なお二、三百字ありて読むべし。」という一文がある。これからみれば法正禪師碑の文は僅か四十七字ではなくて、相当長いものであったということになる。かつ法正は八一九年寂であったと知られる。次に銘文中の「年光六易、度衆千餘」とは、六年間に千余人を度したということである。この六年間は何を意味するか。即ち懷海の寂後（八一四年寂）の六年間に他ならない。つまり法正は第二百丈である。『祖堂集』は第二百丈を涅槃和尚とする。しからば、法正禪師碑銘は銘文だけが残り、残欠が多いためか、序に当る部分が省略されたものに違いない。そして柳公権の撰述とするのは、銘だけが柳公権の撰述であったか、書家として有名な柳公権の名が強く意識されて、いつの間にか武翊黄の名が脱漏したかであろう。即ち法正とは涅槃和尚に他ならなく、また惟政のことであったのである。

る。例えば道吾円智が百丈涅槃に就いて受具しているが、宋高僧伝では幼年で出家を求めたとしているものの、祖堂集では相当の年齢のいつてからの出家とされ、涅槃が法正であろうとする推測を成り立たしめる。法正が律者の相貌を現わし、涅槃が涅槃学者から禅者に転じた相貌を現わし、惟政を別出したから『林間録』⁽³⁷⁾で惟政を別人としてしまったのであろう。その過誤のもと『伝法正宗記』⁽³⁸⁾に惟政を馬祖の弟子、涅槃を百丈の弟子と別出したところにある。これらのことから考えてみると、法正の律は多分に涅槃經の律の影響によっていると考えられ、懷海と共に百丈清規の強力な推進者となったと考えられるこの法正の戒律観は、百丈清規を考える上で重要な視点を提供することとなる。

百丈山では黄檗希運・福州大安・五峯常観・九仙梵雲・東山慧・包山天性・竜雲台・遼山藏術・廬山操等多くの弟子が学んでいるが、雲巖曇晟は石門山で出家し、続いて百丈山でも学んでいる。

次に西堂智蔵が鍾陵に居たという記事もある。西堂の碑文である「龔公山西堂勅諭大覺禪師重建大宝光塔碑銘」⁽³⁹⁾では、「大寂、將に化を示さんと欲して、鍾陵より、茆を龔

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

公山に結ぶ」と言っている。鍾陵とは唐に一度置いた県名で、ついで廃して南昌に入れ、宋に復した。故城は今の江西進賢県西北であった。西堂は灯史類よりみれば、馬祖が洪州に入るに当って、龔公山の後を任された人である。馬祖入寂の年には西堂は五十四歳にもなり、馬祖の体力の衰えた最晩年、一時的に鍾陵に行ったということならば兎も角、それまで鍾陵（即ち洪州の意）で馬祖に従っていたとは考えられない。この西堂の碑銘が作られたのは咸通五年（八六四）で、西堂の寂後四十年もたつてからのことである。この西堂の碑銘が作られたのは咸通五年（八六四）で、西堂の寂後四十年もたつてからのことである。李渤の碑銘は今見られぬから、この碑は重要であるが、唐技（又は枝）の碑を僧覚顓の書によって元豐二年（一〇七九）重建したものが今知られるものである。文面がたとえ咸通五年のものでも、四十年の歳月は江西の禅宗を大きく動かしていた。特に馬祖門下にあつては流動性に富み、⁽⁴⁰⁾馬祖門下内であつての南北兩宗のような様相すら出ていた。このような情況下における建塔であつたから、その動きが文面に出て、馬祖入寂まで馬祖に従って近くにいた、とされたのであろう。西堂は馬祖寂後龔公山に住したとみ

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

るのは適当でなく、却って西堂を損うものである。

また馬祖の弟子である亮は西山に住した。西山は新建県西の章江（漳江）を距てた三十里にある。散原山とも厭原山とも南昌山とも言い、高さ二千丈、周三百里の大きな山で、南昌・新建・奉新・建昌の四県に跨っている⁽⁴¹⁾。『輿地紀勝⁽⁴²⁾』に、新建県西三十里に福嚴院があり、唐の天祐末（九〇七）亮座主がここに講じ、群鹿も来って聴いた、という。けれどもこれは馬祖の弟子の亮とするには時代がひどく距っている。伝承の間に年次の誤りを生じたとすれば、福嚴院が亮の講じたところといえる。亮はもと蜀の人で、西山において經典を講じ、一家を成していたが、馬祖に会い、一問せられて平生の功夫が氷釈し、聴衆を散ぜしめて西山に隠れてしまった。義教者から禅門に衣を更えた典型的な人である。馬祖の門下には教学に通じた人がいるが、多くは開元寺の時の弟子と推測され、馬祖の禅風が洪州に大きな波紋を投じたことを、亮座主の一件でも察することができる。この西山では石霜慶諸が出家している。

一方馬祖の弟子水老（又は水潦）も洪州に住した。百丈の弟子の慧は東山に居した。東山の位置は不明である。黄檗希運は裴休の招請で、会昌二年（八四二）鍾陵竜興寺で法要

を述べた⁽⁴³⁾。この時の記録が『伝心法要』である。竜興寺の位置が明らかでない。

洪州新建県に雙嶺寺がある⁽⁴⁴⁾。かつ、雙嶺崇勝院という寺も県の西北にあり、これは晋の胡尚が宅を捨てて寺となし、天竺僧曇頭を延いて居らしめたという古刹である。『水経注』では曇頭が建てたとしている。謝靈運の繡経台があるが、寺は廃されて久しい⁽⁴⁵⁾、とされる。この二寺が同寺であるか明らかにできないが、伝灯録の目録によって、馬祖の弟子の道方が雙嶺寺に住したと知られる。その後玄真もここに住した。玄真は初め道吾に学んだが契わず、塩官に契会した人である。

百丈の弟子梵雲も目録によって九仙山に入ったと知られる。九仙寿聖禅院は奉新県西百里の奉化郷の九仙山にあり、もと大歴禅院といい、梵雲が住し、宋、治平三年（一〇六六）に今の名に改めた⁽⁴⁶⁾、といわれる。梵雲は大歴禅院に住したのであった。

仰山慧寂（八〇七—八八三）は仰山に住した後に新建県の古仏嶺観音院に住した。この院の東に先に述べた雙嶺寺があった。「仰山通智大師塩銘⁽⁴⁷⁾」では洪州石亭観音院に住したという。石亭は元和初め（八〇五）韋丹が洪州刺史であっ

た時、火災を防ぐため民家を瓦葺にしたことに始まり、子の丞相が予章に石を建てて亭としたことによる。そして洪州城西の石亭観音院はその旧趾だ、とされている。⁽⁴⁸⁾古仏嶺観音院とは恐らく同一であろう。この後、広東の韶州東平山に移り住み、そこで寂した。余靖（一〇〇〇—一〇六四）の『武溪集』に、咸通中（八六〇—八七三）知宗大師慧寂が再び僧儀をこの地に恢復した、⁽⁴⁹⁾といっているから、古仏嶺観音院に住していたのは咸通初めかそれ以前のことである。『宋高僧伝』『祖堂集』『景德伝灯録』は皆通智大師とするが、『武溪集』では知宗大師といっており、『全唐文』の「塋銘」では智通大師として、まちまちである。武溪集を参考にすれば、智通大師が妥当のように思われる。仰山にとっては洪州は必ずしも意に叶った地ではなかったようである。

趙州の弟子の善信は嚴陽尊者と称され、武寧県嚴陽山新興に住した。⁽⁵⁰⁾嚴陽山は武寧県南四十里にあり、嚴陽尊者が住したところと伝えられる。新興が新興寺のことならば、新興寺は武寧県三山の上にある。⁽⁵¹⁾しかし三山が不明である。三山が三卷山の誤りとすれば、三卷山は武寧県東南三十里にあり、嚴陽山の程近くとなる。このようにみると、

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

新興とは新興寺のことと知られよう。また別に武寧県治の西に明心寺という寺がある。天祐間（九〇四—九〇七）嚴陽尊者が明心寺に住した。蟠石に踞坐すると、常に二虎一蛇が左右に循環していた。没して塔を寺中に建てた。淳化中（九九〇—九九四）にその塔をひらくと、髪は垂れて踵に達し、指甲は臂を過ぎていた、⁽⁵²⁾と伝えられている。善信が活躍したのは嚴陽山（又は新興寺）で、晩年武寧の町に出て明心寺で寂した、ということになろう。隆昌前期に亘る人である。

〔筠州〕（もと洪州）伝灯録の目録に、徑山洪諲の弟子の米嶺が挙げられている。米山は高安県北二十里にあり、その平坦通行の処を米嶺と名づけ、四面に泉が流れ、土地は肥沃で、禾を生じて香ばしく茂り、米が精美とされている⁽⁵³⁾ところである。地名によって名を得ている人である。

高安には百丈の弟子の無畏が住した。筠州はまだ洪州に属していたが、五代に入って筠州が置かれ、高安はその中心都市となる。無畏も目録だけで詳しいことはわからない。また高安の大愚山には帰宗智常の弟子の大愚が住した。この人も山名（又は寺名）をもって名を得ている人である。大愚山は瑞州府（＝筠州）城東門外にあり、山麓に真如

江西の禅宗の推移(上)(鈴木)

寺がある⁽⁵⁴⁾。真如寺は大愚寺とも名づける⁽⁵⁵⁾。大愚禅師は高安の人で、少くして遊方し、廬山の帰宗禅師に得法した。還つて大愚の灘頭に庵したがために因つて号した⁽⁵⁶⁾。灘頭とは錦江に面した流れの急なところという意ではなからうか。臨済は大愚に参じ、接化を受け、「仏法多子なし」と言つたことで、逆に大愚の名も今に残る。臨済は黄檗の法を嗣いだ。大愚の嗣法の弟子は末山了然尼であつた。

百丈の弟子藏術は目録によつて遼山に住したと知られる。遼山は高安県西南四十里にある⁽⁵⁷⁾。武寧県西北八十里にもこの名の山があるが、辺鄙すぎるから、藏術の住したのは高安県の方とみるのが無難である。百丈の弟子に包山天性もいるが、目録のみで詳しいことは分らず、包山の位置も不明である。高安はこのように禅宗の盛んな地となつていく。

了然尼は大愚に学んだ後、九峯末山に住した。末山は上高県(もと高安県)西六十里(西南六十里宣風郷)にあり、九峯が連なり、雲末を廻り出す故に名づけられてゐる⁽⁵⁸⁾。末山には後に多くの人が住するが、了然尼が最初に入つた人である。

この期この地方で最も注目すべきは、百丈の弟子希運が

黄檗に住したことである。希運は福州閩県の人で、福州福清県の黄檗山で出家し、百丈山で懐海に学び、黄檗山に住した。黄檗山は新昌県(もと高安県、今の宜豊県)西七十里にあり、鷲峯山とも呼ばれている。絶頂に鷲峯寺があり、宣宗が竜潜の時、黄檗と瀑布を觀て句を聯ねた、といわれている⁽⁵⁹⁾。黄檗山の飛泉は新昌八景の一とされている⁽⁶⁰⁾。天竺の僧が、わが国の靈鷲山に似ている、といったことから鷲峯山と名づけられ⁽⁶¹⁾、それを黄檗山というのは、希運が、故郷に近い、出家したところの黄檗山を偲んで名づけたからである。黄檗寺は新昌県の四十都にあり、唐に靈鷲寺と名づけた。断際禅師希運の道場で、宋の紹興九年(一二三九)報恩光孝禅寺と賜わつた⁽⁶²⁾。しかし『伝心法要序』では、裴休が、伝心法要を黄檗山広唐寺へ届けてもらつた、ということを行っているから、黄檗寺は広唐寺というのが正式の名であつたらう。黄檗は後に洪州大安寺に住し、裴休の招請で鍾陵の竜興寺で宗要を述べ、次いで宛陵(安徽宣城)にも請されて、開元寺でも宗要を述べた。それが裴休によつて記録され、前者を『伝心法要』といい、後者を『宛陵録』というのである。宛陵でも黄檗寺に住したが、これは散亭山にあつたと思われる。故に希運に関して黄檗は福州福

清・洪州新昌・宛陵の三箇所となる。景德伝灯録では、大中の年（八四七～八六〇）本山（新昌の黄檗山）に終る、とするが、伝心法要の序が書かれたのは大中十一年（八五七）十月初八日とされており、寂年はそれ以前であることとなる。裴休は序中に「会昌二年（八四二）鍾陵に廉たり。山より迎えて州に至らしめ、竜興寺に憩うに、旦夕道を問う」といい、また「大中二年（八四八）、宛陵に廉たり、後に去きて礼し、迎えて所部に至らしめ、開元寺に安居するに、旦夕法を受く」と言っていることから、八四八年以後、八五七年以前の入寂となる。また序に断際禅師という諡号が付されていることから、寂年と諡号の間に若干の期間を要する。諡号の申請は有力な弟子、特に外護者の奏上によると思われるから、裴休がそれに力を尽くすことが大ではなかったろうか。裴休は八五一年二月塩鉄運転使となり、翌年八月同平章事、八五六年六月宣武節度使（開封）となっており、⁽⁶³⁾黄檗の入寂の上限は八五一年となるのではなからうか。⁽⁶⁴⁾黄檗は身長七尺、額に肉珠があり、天性、小節に拘らぬ人で、臨済を初めとし、多くの俊秀を生んだ。裴休は嘗て圭峯宗密に学び、寂後碑銘も書いているほどであるから、当然洪州宗に対する宗密の態度も知っているはずで

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

あるが、伝心法要序にはそれに関することが何ら触れられていない。

百丈の弟子常観は筠州五峯山に住した。五峯山は新昌県西（又は西北）七十里にあり、五峯があるので名づけられている。⁽⁶⁵⁾僧が「五峯の境」を問うと、「険」と答え、「境中の人はどうか」と問うと、「塞」と答えている。険峻なとりつきようもない禅風だったようである。また一指頭禅は天竜より受けたものとして金華俱胝において有名であるが、常観に既に行われていたのである。

この期の末に良价（八〇七～八六九）が洞山に住する。洞山は会稽諸暨県（浙江）の出身で、五洩靈黙・南泉普願・潯山靈祐・南源道明・石霜大善・薯山慧超・隠山・興平等多くの人に参学し、雲巖に嗣法して洞山に住した。遊歴の幅広さは洞山に勝る人がいない。「筠州洞山普利禅院伝法記」⁽⁶⁶⁾によれば、会昌の破仏で箕州に隠れた、といわれる。箕州は山西省の東、河北省境である。洞山はどうしてこんな北地に隠れたのだろうか。この機に白衣で仮に菓山の生地絳州を尋ねたとしても、山西の南部であるから程遠く、僧ならば一度は拝したいと願った五台山はもっと北にあって程遠いし、破仏中では五台山に文殊を拝することも当を

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

得ないことだ。山西は朝廷にも近く支配力も強かったろうから、何らかの縁があったとしても考え難いことである。いったい破仏の時どこに居たかということとは、どの僧をとってみても明らかにされていない。しかるに洞山伝法記では箕州とはっきり記す。筆者はこのことについて、伯夷叔齊が箕山に隠棲したことをもじった破仏に対する諧謔ではなかったかとも考えている。洞山伝法記で儀南（箕州のこと）から新豊洞に入ったとするのは、この見方を打消し、事実のことと思わせるが、或は洞山自身の口で言ったかもしれない諧謔が、事実のことと変じたとも受け取れる。伯夷叔齊の隠棲した箕山といわれるところは各地にあり、山西の箕山はその一つに過ぎないが、今思っている考えを記してみた。

一般に、洞山は新豊洞から洞山に移住したと伝えられるが、新豊洞とは洞山のことである。新豊洞は新昌県の東北七十里の三十都にある。即ち洞山寺の基で、普利寺があり、唐の雷衡が捨てて寺とした。洞山は新昌県の東北五十里にあり、もと新豊洞となし、下に普利寺がある。⁽⁶⁷⁾「疎山白雲禪院記」⁽⁶⁸⁾にも、「高安の西に山あり、洞山という。即ち新豊これなり」という。けだし新豊洞の山、または新豊

洞なる山、或は新豊洞山の新豊が略されて洞山となったのであろう。洪州宗が衰退期に入っているのに対して、洞山は、破仏の後の、仏教の復興に応じた新しい禪宗の一つの拠点で、禪宗はこの頃より新しい段階に入っていく。⁽⁶⁹⁾洞山下は馬祖下ほどの層の厚さと各地への拡散の度合いはなかったけれども、それに次ぐものである。その新しい段階とは何かというと、江西にも仰山がいたし、湖南には徳山、石霜、夾山が出、河北には臨済が出るといような具合で、時代に即応して生じてきたものであり、何よりも南宗内において——当時既に禪宗は南宗だけになっていたが——禪風の相違を生じたということである。洞山は道理を明らかにすることにつとめ、決して棒喝は用いなかった。雪峯は投子に三度登り、洞山に九度登ったと言っているが、それでも洞山に許されなかった。雪峯が洞山と契合しなかったのは、洞山が道理を厳密に説き示すのに対し、雪峯はそれを言葉でなく行動で示そうとしたからである。洞山はそれだけに諸方の祖師の言葉に敏感であった。洞山のそのような資質は、若くして参じた南泉に、早くも「作家」と評されたところにも伺い知れよう。道理を問うては「首座を問殺する价」⁽⁷⁰⁾といわれる程の厳格さ、綿密さであった。しか

しその裏には老婆心がある。咸通十年（八六九）三月朔日、逝かんとしたが、弟子の悲号に、「出家人は、心の物に依らざることを、これ真の修行なり」と諫め、七日の齋を設け、八日沐浴して端坐入寂した。これを愚癡斎といった。

『宋高僧伝』では、系して、「价の来去自由なるごとき者は、近世に一人なるのみ」と評している。理智的な偈頌を多く残しており、『新豊吟』『宝鏡三昧』『玄中銘』は代表作である。

〔南康府〕（もと洪州）ここは洪・江二州の地で、宋の太平興国七年（九八二）南康を置き、星子・都昌・建昌（今の永修）の三県を置いた。廬山については別に一節を設けたから、禅宗関係は建昌県だけになり、従って本論における年代の範囲では、殆ど洪州に属する。しかし瑞州府（筠州）や臨江府を別出した理由と同じく、南康を洪州から切り離して、ここに一項を設ける。この時期にはまだこの地域に禅僧の出世はない。ただ記すべきは、雲巖の本貫であったことだけである。『祖堂集』⁽⁷¹⁾では、雲巖と道吾は実の兄弟で、道吾は兄であったが、出家は雲巖より遅かったとし、姓は王氏で、鍾陵建昌県の人とする。しかし伝灯録では道吾は姓は張氏、予章海昏の人とし、雲巖は姓は王氏、鍾陵

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

建昌の人として、祖堂集のように実の兄弟であったとはみていない。宇井伯寿氏⁽⁷²⁾は雲巖の年齢のことと共にこのことについて詳しく考証され、雲巖は七八〇―八四一の一生の人で、道吾が実の兄弟であるということを否定されていた。雲巖は建昌に生まれ、石門で百丈に出家参学したのであった。

〔袁州〕 仰山慧寂が王莽山から仰山に移住した。『仏祖統紀』⁽⁷³⁾や『仏祖歴代通載』⁽⁷⁴⁾では、徒を領して王莽山に入ったが、禅床が地に陥ちてしまうという事があり、山神が、住するに適當ではない、東南に大仰山があり、人間の福地だ、と言われたので移った、という。王莽山がわからないう。仰山の西北にあるはずである。河南輝県に王莽城があり、西北に当るが、多分もっと近いところ、湖南の澧州から長沙の線上にあるのではなからうか。仰山は宜春県南八十里にあり、袁州の鎮山である。周数百里、高く聳えること万仞で、仰いでも登られないということと名づけられている。山下に鄭谷の読書の処、太平興国禅寺、二神廟、小釈迦骨塔がある。⁽⁷⁵⁾世に、二神が小釈迦（即ち仰山慧寂）に地を捐てて与え、庵が築かれたところと伝えられ、貝多葉梵書、仏牙、舍利をここに蔵していた。寺は江右の名刹で、

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

古松、夾道、飛瀑、湍激のさまは、人境になきがごとくである。堂殿に黃庭堅の書額が多い。⁽⁷⁶⁾ 太平興國寺は瑞州府城南大仰山下にある。唐の會昌中（八四一～八四六）名を棲隱と賜い、宋に、今の額に改めた。⁽⁷⁷⁾ 仰山の住したところである。仰山は本貫が韶州懷化（広西）であるとも、韶州湊昌（広東）であるともいう。また出家地が韶州南華寺（＝六祖の宝林寺）とも広州和安寺ともいう。耽源・瀉山・巖頭・石室に学び、瀉山を嗣いで王莽山に住した。しかし化縁未だ契わず、仰山に移住したのである。『仏祖歴代通載』は八一四一八九〇年の人とし、『仏祖統紀』は八九一年寂とし、『景德伝灯録』は七十七歳寂とするが、『宋高僧伝』『祖堂集』は言わない。しかしここは陸希声の「仰山通智大師塏銘」により、八〇七―八八三の人とすべきである。十七歳（八二三）出家し、翌年耽源に学び、ついで瀉山に参ずること十四、五年、足が跛えてしまい、跛脚驅鳥と称された。瀉山に学んだのは八三七、八年頃から八四一、二年頃までであろう。祖堂集では、三十五歳出世し、諸州の節度使や觀察使や刺史が相継いで十一人礼した、と言っている。三十五歳は八四一年になる。そして王莽山に住したから、間もなく破仏に遇ったこととなる。禪床が地に陥ちた

というのは、東寺如会のごとき禪の盛んな貌のあまりの折牀会と称されるのとは逆に、破仏を意味するのではなからうか。破仏は一応の区切りになるから、仰山に入るのは破仏以降とみるのが自然であろう。

陸希声の塏銘では、希声は仰山より三十歳年下であった。希声は瀉山の真の弟子は三人で、「一曰仰山、二曰大安、三曰香巖」として「三人同体異用」であると評する。大安を瀉山の弟子としたことは注意を要する。そしてかつて香巖の碑を作り、そこで三師の旨を論じた、と言っている。今それを見られないのは残念であるが、ただ香巖は一般に八九八年寂とみなされているものの、仰山は八八三年寂、仰山の塏銘は乾寧二年三月（八九五）病氣の中で撰じたものとされている。しからば香巖の寂年はこの塏銘によって八九五年以前と正されなければならない。そして恐らくは仰山の寂する以前の寂とみてよい。

陸希声の生卒年はわからぬが、『新唐書』⁽⁷⁸⁾によれば、博学で文をよくし、易・春秋・老子に通じていたし、著述も多かった。鄭愚に見出され、王仙芝の乱の後、擢でて歙州刺史となり、昭宗はその名を聞いて戸部侍郎同中書門下章事としてしいる。太子少師をもって八九五年四月罷めた。⁽⁷⁹⁾ 仰

山の塋銘は罷める直前のもので、罷めたのも病氣のためであった。鄭愚は瀉山の碑銘を書いた人である。王仙芝の乱は八七四年十一月に起こったから、それ以前に嶺南の官であったのであろう。鄭愚は咸通初め桂管節度使となっていた。八六三年、蠻が邕州に逼まり、鄭愚自ら、儒臣は將略なし、⁽⁸⁰⁾と言って、康承訓を以って代えた、といわれるから、陸希声はこの頃鄭愚の下にあったのではなかろうか。陸希声は嶺南で官に在った時、石亭観音院の仰山に参じ、また仰山が東平山に移ってからも参じたと言っているから、これらのことより、八六三年頃から八七四年頃までの間に仰山に参じ、仰山はこの間に石亭観音院から韶州東平山に移ったということになる。

仰山は円相を以って禅の境地を示した。『袁州仰山慧寂禅师語録』(『五家語録』之内)でも瞥見できるが、『祖堂集』卷二十の大半を費して、仰山の弟子の五冠順之の章を立て、その中で円相について多くを載せているので参考になる。いつごろから仰山は小釈迦と呼ばれていた。また神異の者がふつとたずね、忽ち去っていくことがあったりして、人々には測り知れぬところがあった。智に通じ、神秘的な面を示している。瀉山と仰山は父子の親密さに喩えら

江西の禅宗の推移(上)(鈴木)

れるが、その様子は、『瀉山語録』などによくあらわされている。しかし何かしら意図的なものも感じられる。例えば大安・香巖を意識して、瀉山の本流を強調しようとしたのではないかとも思える。『祖堂集』⁽⁸¹⁾に載せるところを述べてみよう。香巖が撃竹の偈を作り瀉山に呈した。瀉山は大衆を集め、共に賀したのである。ところが仰山はその場に居合せず、後に知り、瀉山に験したかを尋ね、験していないと知ると、香巖のところに行き、賀しながらも、験し、更に一偈を聞いて、如来禅あるも祖师禅あるを知らず、と評したのである。このように瀉山下において、仰山を強調する面が屢々見られるのはあるが、ただ派内の問題のみで見るとはならず、もっと広く破仏後の江西・湖南の禅宗の新しい波の中でとらえていかねばならぬことである。ということとは洞山や巖頭などにはっきり見られるような、禅風の特徴が意識されてきていることの中の瀉山の父子ということでおさえねばならないということである。

別に崔行潜の「通智大師碑」⁽⁸³⁾があり、保大二年(九四四)陳覺が重書している。同年陸希声の塋銘も陳覺が重書している。崔行潜の碑文がどんなものであったか、そして崔行潜がどういう人であったか、わからない。仰山の神異の面

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

を強調した碑ではないかと思われる。

馬祖の弟子の道明は南源山に入った。南源山は萍郷県北五十里にあり、山は平坦で、上に羅漢に似た石があるので羅漢巖という。下に広利禅院がある。⁽⁸⁴⁾南源広利寺は宜春県にあり、唐の道明が建てた。⁽⁸⁵⁾萍郷と宜春は隣合った県であるから、南源山は両県に跨っているものであり、寺は宜春県に属しているのである。洞山は道明の許で学んだ。洞山が去ろうとした時、「多く仏法を学び、広く利益をなせ」と説示した。洞山がどのように利益するかを問うと、伝灯録では「一物も違うことのなきことだ」と言い、祖堂集では「一物も為さないことだ」と言ったとする。意味は異なるようにみえるが、「心心間断なく、性海に流入す」とも言っているから、馬祖の「即心是仏」の道理である。洞山はこの語を聞いて、改めて二年間学んだと祖堂集では言っている。

楊岐甄叔（一八二〇）は馬祖に学んだ後、萍郷県の宣化里にある楊岐山広利寺に居した。広敷・乗広の住したところであった。萍郷県北の萍実里に同名の広利禅寺があるが、乾符四年（八七七）建ったとされるから、こちらを指すのではない。また南源山の広利寺も宜春県に属しているから、

甄叔の住したところではない。甄叔には志閑の碑文がある。この碑は有名で、各書に載せている。一般に碑の収録の関心は、多くは書風にあり、少しく文体にある。碑文の内容には関心が薄いから、我々の研究の意図に合致せず、残念さを感じることもある。この碑の有名なのも書体にあったのである。それで訪碑の記録にはたまに基本的な誤りを犯している場合もある。その一例をこの碑にとってみよう。

『宝刻類編』巻五及び巻八に、

楊岐山甄叔大師塔銘碑陰

沙門至閑撰 僧元幽行書
王周古錄額 太和六年四月三十日建

とある。清、劉体信（声木）の『続補寰宇訪碑録』巻十三に、

楊岐山甄叔大師塔銘碑陰

宝光等題名 行書
太和六年四月卅日 江西萍郷

とあり、碑陰もあったと知られる。太和六年は八三二年である。清、孫星衍の『寰宇訪碑録』巻四には三十日と、王周古篆額との記載がない。『全唐文』巻九一九では至賢撰とするのは誤まりであろう。『金石萃編』巻百八、清、錢大昕の『潜研堂金石文跋尾』巻八も至閑とする。但し甄叔を乗広の弟子とし、元和庚寅（八一〇）に寂するとする。跋尾は内容を正しく見ていない。清、武億著、男穆淳編の

『金石二跋』（授堂金石跋）卷三に、劉夢得撰及正書、劉申錫篆額の「唐甄叔禪師銘」（八〇七年五月）のあったことを言うが、これは乗広と混同した誤まりである。夢得とは禹錫の字である。清、洪頤煊の『平津讀碑記』は跋尾の庚寅、金石萃編の庚午を共に誤まりとする。清、繆荃孫の『芸風堂金石文字目』卷六は宝刻類編の通りであり、年月日に干支を入れている。顧燮光の『袁州石刻記』は欠字が多いが、碑文を書き写していて信頼がおける。これは年月日に干支を入れていて、そして編者は甄叔を乗広の弟子とする。本文を金石萃編のものにつき合せてみると、文字に多少の異なりはあるが、金石萃編が、甄叔の寂年を「元和庚午歳」とするに對し、石刻記は「元和庚子歳」とする。元和には庚午はないが庚子があり、十五年に当たる。これによって「庚子」であったことがわかり、金石萃編の誤まりを正すことができる。但し、乗広の弟子としたのはどうにも解せない。なぜならば碑文中に「扣大寂禪門」と明記しているからである。石刻記の編者の何らかの誤解である。石刻記には碑陰も録している。それには百八十五名の名が並んでいる。建立の施主名であろう。碑の高さ、文字の数を記し、碑陰の人名を列挙していることから、顧燮光

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

は明らかに実物を記録しているのである。またこの碑陰の名を見て興味深く感ぜられることは、檀越信者の名が圧倒的に多いが、女性も相当数あり、それに父や弟の菩提を葬う意図のものもあったり、女道士の名も見られることである。禪の擁護者が支配層だけのものでなく、幅広い民衆に深く根をおろしていることが知られよう。この碑については金石萃編よりも袁州石刻記の方に価値が見出せる。

〔臨江〕 新淦縣（もと吉州に属す）にある耽源山の真応に、弟子の貞遂及び瀉山の弟子の仰山が学んだ。新淦の玉笥郷は石霜慶諸の本貫である。ここは後に開けていく土地柄で、見るべきものはない。

〔吉州〕 吉州の薯山は位置が不明である。ここに東寺如会の弟子の慧超が住した。わずか洞山との問答が一つあるだけである。慧超は洞山に「好箇の仏、ただこれ光焰なし」といつている。この言葉は、伝灯録の巖頭章で巖頭が、「洞山は好箇仏、ただこれ光なし」と評した、洞山を肯んじなかったと同じ言葉である。巖頭が慧超の評語をそのまま採ったのか、或はもっと他の見方をすべきか俄には言い難いが、指摘だけしておこう。この頃、潮州大顛の弟子も薯山に住したことが伝灯録の目録で知られる。この人

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

は名が知られず、それで吉州薯山和尚と地名で呼ばれている。伝灯録は三平とこの薯山だけを潮州の弟子としているが、『聯灯会要』巻二十では馬頰山本空の語を出している。馬頰山は永新県東四十里、安福県との境にある山で、吉安の西に当る。

丹霞の弟子の性空は孝義寺に居した。孝義寺は吉水県の東山にある。唐の宝曆三年（八二七）僧性空が丹霞より来たり、ここに茅を結んだ。太和中（八二七～八三五）叢席となり、宋の紹聖中（一一〇九四～一一〇九八）青原の僧惟信を延いて住持せしめ、政和間（一一一一～一一一八）張商英が朝廷に言奏して崇義禪寺と賜った。南宋の後僧師能は南岡寺と改め、崇義を山の名とした。⁽⁸⁶⁾ 崇義山は吉水県の北二十里にある。⁽⁸⁷⁾

〔撫州〕石鞏慧藏は恐らく臨川（撫州）で馬祖の弟子となったのであろう。初め獵師であった。馬祖の一箭に一群を射る、という語で出家した。後に石鞏山に住した。宜黄県の南十里に雲華山があり、その南十里に石鞏山がある。石梁があり、突起すること数十丈である。そこに義泉寺がある。義泉寺はもと宜黄県上源にあったが、鄒度支が額を請うて石碧（＝石鞏）に徙した。唐成一は田を施して創建し

た。馬祖が庵を結んだところである。⁽⁸⁸⁾ 彼は弓箭をもって学人を接した。三平義忠、福州大安もここで学んでいる。『弄珠吟』⁽⁸⁹⁾があった。

〔信州〕馬祖の弟子大義（七四六～八一八）が鷲湖山に住した。鷲湖山は鉛山県北十五里にあり、三峯揭秀し、その顛に瀑布泉がある。周囲四十余里で、県の鎮山というべきである。山上に湖があり、多く荷（はす）を生ずるので荷湖山と名づけた。東晋の時に二匹の鷲がいて、子数百羽を育て、成長させて去った。それで今の名に変えた。唐の大曆中（七六六～七七九）僧大義が錫を山中の双鷲に卓て、また山の麓にかえり、仁寿院を建てた。後に鷲湖寺と名づけた。⁽⁹⁰⁾ 鷲湖寺は鉛山県北十五里にあり、鷲湖山を以て名を得る。唐の大曆中、大義禪師が峯頂に庵を結び、後に官道に臨むところに移した。宋、咸平間（九九八～一〇〇三）額を慈濟禪院と賜い、景德四年（一〇〇七）仁寿と賜った。⁽⁹¹⁾ 大義には韋処厚⁽⁹²⁾の碑文がある。伝灯録も祖堂集もこれによるところが大きい。衢州須江（浙江）の人で、そこで出家し、二十歳で受具、後に馬祖に参じた。大曆中には鷲湖山に入っているから、龔公山で馬祖に学んだのであろう。貞元初（七八五）礼部侍郎であった劉太真⁽⁹³⁾が出でて上饒郡をつかさ

どり、師を山下に住せしめた。劉太真是文に秀でた人であったが、貢士を掌って、多く大臣貴近の子弟を推挙したので、坐し貶されて信州刺史となり、卒した。貞元四年（七八八）の曲江の宴に名を列ね、群臣詩を詠じ、帝自ら席次をつけて上となしている。それで鷺湖を山下に請じたのは、四年以後ということになろう。大義は京師に出で、入内して麟徳伝で法を論じたのであるが、伝灯録では憲宗（八〇五―八一九在位）の時とする。しかしこれはおかしい。碑文中、永貞初、順宗（八〇五年のみ在位）が康からず、それで信州に帰ったとされるから、順宗の次の憲宗では話が合わない。碑文中、孝文皇帝が内道供奉大徳となしたとしている。『新唐書』では徳宗（七七九―八〇四在位）は神武聖文皇帝というが、旧唐書では神武孝文皇帝というから、孝文帝とは徳宗である。即ち徳宗の召命で入内し、順宗にも法を説いたが、帝の健康が悪かったので、信州の鷺湖山に帰ったのであった。憲宗の時は京師でなく、鷺湖山に帰っていたのである。文は年次通りに叙していないから、そんなことで伝灯録では見誤って憲宗の時入内したとしたのであろう。馬祖下で最初に入内した人である。

〔饒州〕（鄱陽郡） 鄱陽はかつての蒙山道明の本貫である。
江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

った。ここに馬祖の弟子の興善惟寛（七五五―八一七）が一時住した。興善の本貫は鷺湖の本貫に近い衢州信安（浙江）の生まれで、馬祖に学び、貞元六年（七九〇）呉越に遊び、七年会稽で滕家道場を作り、猛虎を伏し、そして鄱陽に入り、山神のために廻向道場を作った。碑文⁹⁴によって、この時、八年（七九二）とされる。十三年には嵩山の少林寺に非人を感じしめている。そして元和四年（八〇九）憲宗皇帝に召されたのである。これよりみれば興善は幅広い現世利益の宗教活動を行なったようである。興善は馬祖が洪州開元寺に住した時の弟子であろう。馬祖の寂後、出でて各地に住したものとみえる。出家して毗尼を習い、大乘の法を止観に証した、といわれるから、天台学にも通じた人であった。馬祖の開元寺での弟子の特徴を示す人である。唐技の西堂の碑文中に、西堂と興善とを南宗と北宗とに比しているが、⁹⁵このような見方は四十年後の唐技の頃の見方で、西堂・興善の在世中には現われていなかったと思われるが、確かに馬祖の弟子の多彩ぶりの一面を言い表わしている。そしてそれは龔公山と開元寺との弟子の層の違いにあったのである。

饒州嶢山に福州大安の弟子が住した。名は知られず、地

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

名をもって称せられる。嶢山は浮梁県の澆嶺のことである。澆嶺は県の南六十里の長山都にある。風蒙嶺ともいわれる。⁽⁹⁶⁾そこに長慶慧稜が参じている。

〔虔州〕（卽南康郡）馬祖の弟子廬山法蔵は南康が本貫であり、南康の平田山宝積院に出家している。そして馬祖に参じたから、龔公山での出家ではないかと思われる。

宝華寺は龔公山にあり、唐の智蔵禪師の示寂の地である。咸通五年（八六四）郡守唐技が智蔵のために碑を重建した。⁽⁹⁷⁾大宝光塔は宝華寺にある。唐の穆宗（八二〇—八二四在位）が大覚禪師（卽智蔵）のために建てた。武宗の時廃したが、大中七年（八五三）宣宗がまた詔して立てた。唐技がために碑銘を撰したのである。⁽⁹⁸⁾西堂智蔵は馬祖が開元寺に趣くに当って、あとをまかされた人である。馬祖下にあつて最も有力な弟子であつた。開元寺に至つて多彩化する以前の、馬祖禪の純粹さを保つた、そしてまたその牙城となつた人であつた。西常の弟子に処微がおり、この人も虔州に住した。西堂の弟子はあまり多くなく、却つて新羅に流れる。即ち慧・洪直・鷄林道義である。道義は西堂に学び八二年帰国したが、彼の禪は母国では魔説として譏られた。それはあたかも達磨の梁武に遇わないようなものであ

つた。また朝鮮に伝わつた九山禪門の一つの桐裏山派の恵徹も「大安寺寂忍禪師照輪清浄塔碑」により西堂を嗣いだとされる人である。慧徹は八三九年新羅に還り、王が道声を聞いてしきりに書を賜つて慰問し、また使を遣わして治国の要を問うた⁽⁹⁹⁾とされ、この時に至つては道義の時と事情を大いに異にしていた。

隆昌前期と隆昌後期の二期については（下）に譲る。

注

（宋高僧伝、祖堂集、景德伝灯録については特に必要とするものの以外は注記を除いた）

（1）『唐文粹』卷六四、『全唐文』卷五〇一、権徳輿撰「唐故洪州開元寺石門道一禪師塔銘并序」

（2）宋、贊寧撰『宋高僧伝』卷一〇、馬祖章、大正蔵五〇、七六六b

（3）拙稿「即心是仏から非心非仏へ」、『宗学研究』第二三号、昭和五十六年三月

（4）『江西通志』卷一二一、八左。

（5）拙稿前掲論文

（6）『江西通志』卷五〇、一〇右及び同卷一二一、二二右左。同卷五七、一一右。

- (7) 王象之『輿地紀勝』卷二六、一九左。
- (8) 同卷二六、七左。『江西通志』卷一二一、二一右左。
- (9) 清、黃廷金修、蕭浚蘭等纂、同治十二年刊『瑞州府志』卷一、二〇左。『江西通志』卷五一、二二右。
- (10) 『瑞州府志』卷三、三〇右。『江西通志』卷五〇、二七左。
- (11) 清、德馨等修、朱孫詒等纂、同治十年刊『臨江府志』卷二、一〇左。
- (12) 駒沢大学禅宗史研究会編著『慧能研究』（大修館、昭和五十三年三月）三六―七頁参照。
- (13) 『江西通志』卷五一、五左及び同卷一二二、一四右。
- (14) 『金石萃編』卷一〇五及び『全唐文』卷六一〇。
- (15) 『江西通志』卷一二二、二三左。
- (16) 同卷一二三、二右。
- (17) 柳田聖山・梅原猛『無の探究へ中国禅』（『仏教の思想7』、第一部三章「奇跡の魅力」（角川書店、昭和四十四年三月）参照。
- (18) 清、定祥修、劉繹纂、光緒元年刊『吉安府志』卷二、三右。『青原山志略』卷一では青原安隱山という。
- (19) 『江西通志』卷一二三、三左四右。
- (20) 宋、無名氏編『宝刻類編』卷二参照。
- (21) 参考、『宝刻類編』卷六、七右に「重建清居寺碑」段成江西の禅宗の推移（上）（鈴木）
- 式撰、顔稷書并篆額、大中五年四月二十三日記□。按是碑所書殊楷法、とある。
- (22) 『江西通志』卷一二三、四右。
- (23) 『宗鏡錄』卷九八、大正蔵四八、九四〇b―c。
- (24) 『景德伝灯録』卷一四、大正蔵五一、三〇九b。
- (25) 『宋高僧伝』卷一一、西園曇藏章付見。大正蔵五〇、七四四b。
- (26) 清、魏瀛等修、鏡音鴻等纂、同治十二年刊『贛州府志』卷四、一三右。『江西通志』卷五六、二左三右。
- (27) 『江西通志』卷一二五、三五右。
- (28) 同卷一二一、一八右。
- (29) 同卷五〇、九左。『読史方輿紀要』卷八四参照。
- (30) 『江西通志』卷一二一、一六右。
- (31) 『輿地紀勝』卷二七、四左に、『庚溪詩話』を引いて、「唐の宣宗、微なりし時、武宗のこれを忌むを以って、跡を遯れて僧となり、遊方して黄檗に至る。黄檗禪師と同行して瀑布を觀し時、一聯の句を得て云く、『千巖万壑勞を辞せず、遠く見て方めて知る、出ずる処の高きを』と。宣宗これに續けて曰く、『溪澗豈に能く留め住するを得んや、終に大海に帰って波涛と作る』と。」
- (32) 宋、志盤撰『仏祖統紀』卷四二（大正蔵卷四九、三八七a）では宣宗は香嚴の下で出家し、廬山に遊んだ時の唱和

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

であるとされる。

- (33) 『江西通志』卷一二二、一八左。
- (34) 『全唐文』卷四四六。
- (35) 『宋高僧伝』卷一〇、大正蔵五〇、七七〇c—七七一a。
- (36) 『全唐文』卷七二三。
- (37) 宋、慧洪『林間録』、続蔵通卷一四八、三二一b—c。
- (38) 宋、契嵩『伝法正宗記』卷七、大正蔵五一、七五〇b、及び七五二b。
- (39) 『贛州府志』卷一六、一四右—一五右。拙稿「江西の禪宗に関する資料——唐・五代——」（愛知学院大学文学部紀要第八号、昭和五十四年三月）に唐技（又は唐枝）撰文の原文を載せた。
- (40) 拙稿「景德伝灯録に内在する史的な流れ——特に馬祖門下に対するその問題提起——」（愛知学院大学文学部紀要第一号、昭和四十六年十二月）。石井修道「洪州宗における西堂智蔵の位置について」（『印度学仏教学研究』第二七卷第一号、昭和五十三年十二月）。
- (41) 明末清初、顧祖禹『讀史方輿紀要』卷八四。
- (42) 『輿地紀勝』卷二六、一一左。
- (43) 裴休「黄檗山断際禪師伝心法要序」。
- (44) 『江西通志』卷一二一、一三右。
- (45) 同卷一二一、一二左—一三右。
- (46) 同卷五〇、九右。
- (47) 『全唐文』卷八一三、陸希声撰。
- (48) 『江西通志』卷一一四、二五右。
- (49) 宋、余靖『武溪集』卷七「韶州重建東平山正覺寺記」中に言う。
- (50) 『江西通志』卷五〇、一一右。
- (51) 同卷一二一、二三左。
- (52) 『輿地紀勝』卷二六、一九右。
- (53) 『江西通志』卷五〇、二四右。
- (54) 『瑞州府志』卷一、一〇右。
- (55) 『江西通志』卷一二一、一右。
- (56) 『輿地紀勝』卷二七、五右。
- (57) 『江西通志』卷五〇、二四左。
- (58) 同卷五〇、二五右。『瑞州府志』卷一、三左。
- (59) 注（31）を見よ。
- (60) 『瑞州府志』卷一、二九右。
- (61) 『輿地紀勝』卷二七、五右。
- (62) 『瑞州府志』卷三、三四右。
- (63) 吳榮光編『歷代名人年譜』、『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷一八二参照。
- (64) 『仏祖統紀』卷四二（大正蔵卷四九、三八八b及び三八

九a)では黄檗の示寂は八五五年、裴休は八七〇年に薨じたとする。共に何にもとづいたものか明らかでない。

(65) 『瑞州府志』巻一、『江西通志』巻五〇、二七右。

(66) 余靖『武溪集』巻九にあり、この紹介と内容の分析は石井修道氏『駒沢大学仏教学部論集』第七号(昭和五十一年十月)中の「洞山と洞山良价」でなされている。

(67) 『瑞州府志』巻三、三三左。『江西通志』巻一二二、六右。

(68) 『全唐文』巻九二〇、澄玉撰「疎山白雲禪院記」。

(69) 拙稿「江西地方における禅宗各派の展開」(『日本仏教学会年報』第四五号、昭和五十五年三月)に江西地方の禅宗の流れを分析した。

(70) 明、語風円信・郭凝之編集『瑞州洞山良价禅师語録』(『五家語録』所収)大正蔵巻四七、五二一aにこの逸話がある。

(71) 南唐招慶寺静・筠編著『祖堂集』巻四、一四右葉山章中にいう。

(72) 宇井伯寿『第三禅宗史研究』(岩波書店、昭和十八年四月)九一二頁及び二三一二六頁。

(73) 『仏祖統紀』巻四二、大正蔵巻四九、三八九c。

(74) 元、念常集『仏祖歴代通載』巻一七、大正蔵巻四九、六四八a-c。

江西の禅宗の推移(上)(鈴木)

(75) 『江西通志』巻五一、一右。

(76) 『輿地紀勝』巻二八、六右。

(77) 『江西通志』巻一二三、一一右。

(78) 『新唐書』巻一一六、陸元方付伝。

(79) 吳榮光『歴代名人年譜』による。

(80) 同右。

(81) 『祖堂集』巻一九、一一二丈。

(82) 『宝刻類編』巻七、一六左。

(83) 陳覚については吳仁臣撰『十国春秋』巻二六(南唐一二)に列伝を立て詳しく載せる。それによれば海陵の人で、先に烈祖の次子景遷が命ぜられ東都(広陵)に留まった時、宋齊邱の推薦でその補佐をした。宋齊邱は派閥を作り、陳覚はその一派であった。権謀術数に長け、多く相手を陥れたが、九五八年十一月死を賜い、宋齊邱も翌年正月幽死した。

(84) 『江西通志』巻五一、五左。

(85) 同巻一二二、一一左。

(86) 同巻一二三、一四左一五右。

(87) 同巻五二、九右。

(88) 同巻一二三、四一右。

(89) 『祖堂集』巻一四、石鞏章。

(90) 『江西通志』巻五一、三一右。清、蔣繼洙等修、李樹藩

江西の禪宗の推移（上）（鈴木）

等纂、同治十二年刊『広信府志』卷一之二、九左。

- (91) 『江西通志』卷一二四、二二左。『広信府志』卷二之二、一九右。

- (92) 『全唐文』卷七一五、韋處厚撰「興福寺内道場供奉大徳大義禪師碑銘」。

- (93) 劉太真については『旧唐書』卷一三七、『新唐書』卷二〇三文芸に載せられている。

- (94) 『全唐文』卷六七八、白居易「西京興善寺伝法堂碑銘并序」。

- (95) 石井修道前掲「洪州宗における西堂智蔵の位置について」参照。

- (96) 清、錫真修、石景芬纂、同治十一年刊『饒州府志』卷二、一九左。

- (97) 同卷一二五、三五右。

- (98) 『贛州府志』卷一六、一四右。注(39)を見よ。

- (99) 忽滑谷快天『朝鮮禪教史』八五―八七頁及び九二―九三頁。

（付記）

廬山の禪宗（『印度学仏教学研究』第二七卷第一号における同論の続き）

開先寺が衰えたのに対し、帰宗寺はいよいよ盛んになっていった。延寿慧輪の弟子の道詮が開先寺より帰宗寺に移って、第十二世として住した。道詮（九三〇―九八五）は吉州安福県の生まれで、受戒の後、九五四年（二十五歳）ごろ、湖南長沙の延寿寺の慧輪に学ぼうとしたが、途中、楚の将、王逵が道詮を南唐の間者と思い、捕縛して江中に投じようとしたが、道詮は怡然として動ずるところがなかった。王逵は道詮が道を求むる者であると知って釈放した。そして延寿慧輪に十年学び、慧輪が入寂したので廬山に帰り、乾徳初（九六三）廬山東南の牛頭峯下に庵した。牛頭峯は明らかでないが、開先寺付近と思われる。それから九七二年、林仁肇の請で九峯隆濟院に住し、九八四年、南康知軍張南金の請で帰宗寺に住したのである。翌年入寂したので、帰宗寺には最晩年に入ったわけで、実質的には九峯で力量を発揮した人であった。伝灯録では初め開先に錫をとどめ、それから牛首峯に庵したという。次に法眼下が帰宗

寺に入る。策真は初め慧超という名であった。法眼の法を受け、廬山の余家峯に上ったが、請されて帰宗寺に住した。それから金陵の奉先寺に移り、すぐ続いて報恩道場にとどまり、九七九年に入寂したから、帰宗寺に入ったのは道詮よりも先である。法施禪師と号を賜った。義柔も法眼の弟子で、帰宗寺に入り、第十三世となった。上堂語中、「知軍親しく法を証す」という問者の語があるから、道詮と同じく張南金の請を受けたのであろう。九九三年四月寂した。他に師慧、省一、夢欽が住している。共に法眼の弟子である。伝灯録の範囲内では最後に報恩法安の弟子の慧誠が第十四世として住した。初め廬山の金峯（＝金輪峯）に住し、義柔の入寂で、請われて帰宗寺に住し、十四年間、五百衆を領した。帰宗寺は往時の盛況をとりもどしたのである。彼の上堂語は注目に価する。それは、人々が仏の果上にあることを信取せよ、といい、そのことが見性成仏であり、その人は頂族である、といっていることである。彼が上堂語中にいう奇特の方便とは信取にあるに他ならぬ。これまでの問話中心の禪に、明らかな変化を見ることができ。帰宗寺は法眼下で占め、外護者の招請で入寺するという形となり、それだけに経済的裏付を得て、廬山の禅宗

江西の禅宗の推移（上）（鈴木）

の中心地となったのである。

棲賢寺は五老峯の南西にある。初め南齊の証議参軍張希之が尋陽の西南二十里に置いたのであるが、唐の宝曆初（八二五）刺史李渤がここに徙して智常を居らしめたのであった。会昌の沙汰で廃されたが、景福中（八九二―四）護国棲賢寺と号した。ここにこの期に法眼下が住した。即ち鍾山道欽、浄徳智筠、慧円である。清涼文益の弟子の清涼泰欽の弟子である慧聰、同じく報恩法安の弟子の道堅である。このように棲賢寺も法眼下によって占められた。道欽は後に金陵の鍾山の章義寺に移っている。法眼下の傾向として、江西から金陵に移るケースが多いが、道欽もその一人で、これは、南唐となるや、江西、安徽、江蘇を合した大きな国となり、金陵が中心となったからである。道欽もまた上堂語の中で「信取」を説いており、帰宗慧誠と同じ傾向の思想を述べている。智筠も初め棲賢寺に住し、九六五年、智筠のために後主が浄徳道場を建てて請したので、それで金陵に移ったのである。しかし彼は後に故山棲賢寺に帰り、九六九年入寂した。達観禪師と号する。

星子県側の慶雲峯下にある万杉寺はもと慶雲院といい、開先寺の北北西の程近くにある。宋の景德中に僧大超が万

江西の禪宗の推移(上)(鈴木)

杉を植えたので、天聖中(一〇二三—一〇三三)に万杉寺の額を賜ったものである。ここに雲門の弟子の真が住していた。

目録に名を載せるのみで、詳しいことはわからない。羅漢桂琛の弟子の南台守安は、初め、先に永安慧従が住した悟空院に居した。それから衡嶽の南台に移っている。清涼休復の弟子の道旨は宝慶庵に住している。宝慶庵は廬山中にあるにしても、位置は不明である。清溪洪進の弟子縁徳は、『宋高僧伝』によれば雲居寺に住し、李後主の招きで内道場に入り、他と交わるのを好まぬのを知って羅漢院に移らしめ、また円通寺を廬山の石耳峯下円通山に建てて請したので、それに住した。開宝中(九六八—七五)に寂した。彼は頭陀行を修し続けた。一説に神仙の術があったともいわれている。法眼の弟子の慧朗は宋齊邱の請で化城寺に入った。化城寺は上中下の三寺があり、晋の慧遠が建てた程の古い歴史を持つ寺である。宋齊邱は鎮南節度使までにもなったが、術数に長け、朋党を組み、剛直なところがあり、国を奪うという讒言を受け、幽閉せられ、辱しめに堪えず、顕徳六年(九五九)正月自殺した(『十国春秋』卷二〇)。で、慧朗が化城寺に入るのはそれ以前ということになる。法眼の弟子の僧通は大林寺に住した。昔、四祖道信が

居したところで、ここも上中下の三寺があり、中寺は晋の慧遠の創建にかかわる。